

2021年度 研究部活動報告

◎小岩 大
荻野 聡 小林 拓哉
齋藤 貴博 杉坂 洋嗣
中野 未穂 八坂 弘
(◎:研究部主任)

I 本年度の研究体制

1 本年度の取り組み

本年度は、竹早中学校独自の研究と竹早幼稚園・竹早小学校・竹早中学校の連携教育研究(以下、竹早地区連携教育研究)に取り組んだ。コロナウィルス感染拡大防止の観点から、研究活動全体に制限があったが、その中でも可能な範囲で研究を進め、昨年度実施できなかった公開研究会をオンラインの形で実施することができた。以下、今年度の活動内容を示していく。

(1) 中学校独自の研究

1) CCSS プロジェクト研究

2017年度から、大学が自治体と附属学校と連携して進める「附属学校等と協働した教員養成系大学による『経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒』へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクト」の一環として、経済的困難な家庭状況にある児童の主体的な進路選択を支援する「特別連絡進学制度」の開発と、進学後の「校内支援体制」の開発に取り組んでいる。この目的は、「多様性にかかれた附属学校教育モデル」を開発し、他の附属学校や公立学校に普及還元することである。

今年度は、昨年度に引き続き、校内支援体制の深化のために、特別連絡進学制度で入学した生徒の保護者からデータを収集した。また、一昨年度から新たに導入したスクールソーシャルワーカー(以下、「SSW」)による支援について、個々のケースに対する支援を実践しながら、SSWを含めた校内支援体制について深めることがで

きた。

2) 多様性の教育

2018年度から中学校独自の研究として「多様性の教育」の研究に取り組んでいる。これは、CCSSプロジェクトをきっかけとして、多様化する未来を見据えた教育の充実という社会的な要請を踏まえ、竹早中学校の特徴である多様性を見直し、それを生かした教育の充実を図ろうという目的から立ち上がったものである。

研究4年目の今年度は、これまでの実践の成果を書籍にまとめることに取り組み、2月に刊行することができた。研究の基本枠組み「多様性を理解する」「多様性を活かす」に基づく全ての教科の実践と、本校の行事や学校生活を多様性の教育の観点から書き下ろしたページ、そして研究協力者である多田孝志先生を交えた多様性と未来の学校教育をテーマとした鼎談で構成されている。本書を研究のまとめとするのではなく、これからの研究の基盤として位置づけ、更なる研究を展開していきたい。

3) 「中一中連携」の取り組み

東京学芸大学が定めた「年度計画」の「教育に関する目標を達成するための措置」では、「附属学校と地域との連携体制について検討する」ことが挙げられている。

それを踏まえ、本校では文京区の公立中学校との「中一中連携」の活動を模索してきた。その方策の1つとして、9年前から文京区教育研究会(以下、区教研)にオブザーバーとして参加してきた。今年度も、いくつかの教科で交流を行うことができた。

(2) 竹早地区連携研究

1) 研究体制

今年度から第8期研究「未来の学校をみんなで創る」に取り組んでいる。これは、東京学芸大学主導の産官学連携プロジェクト「未来の学校みんなで創ろう。PROJECT」の一環として位置づくものである。このプロジェクトの目的は、10年後の学校モデルを、大学、企業、教育委員会等と連携してつくることであり、竹早地区は研究実践の場として位置づいている。オンラインの形ではあるが、昨年度実施できなかった幼小中連携公開研究会を、2022年1月21日(金)に行い、今年度の研究成果を発表することができた。

研究体制は、幼小中3校種の連携委員13名により構成される連携委員会と、全教員で研究の方向性や活動を行う連携研究会によって構成された^(注)。中学校では、例年同様、研究部員全員が連携委員を兼務した。

連携研究会では、10の研究テーマに基づくチームを立ち上げ、全教員が自分の希望するチームに所属し、チームごとに研究を進めていった。その運営は、連携委員がそれぞれ担当のチームをもち、リードする形をとった。本研究の特徴は産官学連携という点にあるため、連携委員は、連携研究会での研究活動のリードだけでなく、大学の先生や企業、教育委員会の方とも、オンライン会議等で連携をとりながら研究をリードし、創っていった。

2 研究部分掌

本年度の研究部の分掌は、以下の通りである。

- 附属・研究推進委員会等渉外 (小岩)
- 公開・校内研究会推進 (杉坂)(中野)
 - 多様性の教育 (齋藤)(小岩)
 - ・書籍 (荻野)(杉坂)(小岩)
- 研究紀要 (中野)(八坂)(荻野)
- 研究資料 (八坂)
- 予算 (小岩)
- 幼小中連携委員会 (小岩)(荻野)
 - (齋藤)(杉坂)
 - (中野)(八坂)

以上の分掌で滞りなく活動することができた。

II 研究部の活動経過と内容

1 本年度の研究活動経過

(1) 研究部会・校内研究会

研究部の活動【○】及び校内研究会【◎】の内容は、次の通りである。

- 3月3日 第1回研究部会
 - 係分担、年間計画
- 4月6日 第2回研究部会
 - 今年度の活動について検討
- 4月14日 第3回研究部会
 - 「多様性の教育」の書籍の内容の検討
- 5月12日 第4回研究部会
 - 「多様性の教育」の書籍の構成の検討
- 6月2日 第5回研究部会
 - 「多様性の教育」の実践のふり返り
- 6月16日 第6回研究部会
 - 書籍の構成と実践ページのプロットの検討
- 7月7日 第7回研究部会
 - 書籍の構成とパイロット原稿の検討
- 9月1日 第8回研究部会
 - 書籍の執筆者及び構成の検討
- 9月8日 第9回研究部会
 - 書籍の紙面構成の確認
- 9月29日 第10回研究部会
 - 書籍の紙面構成、目次の確認
- 10月12日 第11回研究部会
 - 中学校研究紀要募集について書籍の検討
- 11月8日 第12回研究部会
 - 次年度以降の研究の方向性の検討①
- 11月4日 第13回研究部会
 - 次年度以降の研究の方向性の検討②
- 12月8日 第14回研究部会
 - 次年度以降の研究の方向性の検討③
- 12月17日 第15回研究部会
 - 次年度以降の研究の方向性の検討④

- 1月 12日 第16回研究部会
次年度の研究「竹早プロジェクト」の検討①
- 1月 28日 第17回研究部会
次年度の研究「竹早プロジェクト」の検討②
校内研究会について
- ◎ 2月 18日 校内研究会
次年度の研究についての協議
- 3月 2日 第18回研究部会
次年度の連携研究について
次年度の多様性の研究について

(2) 「中一中連携」の実践

9年前より、文京区の区中研にオブザーバーとして参加している。今年度も、昨年度に続き、コロナウィルス感染拡大の影響により活動が十分にできなかったが、今後もさらに次のことを積極的に行っていききたい。

- ①授業研究会のオープン化と公開研への誘い
- ②区教研への会場提供と参加
- ③研究会等への講師派遣

2 幼小中連携研究活動経過

(1) 連携委員会

竹早地区連携研究では、幼小中の連携委員 13名と各校種の管理職で構成する連携委員会と全教員参加の連携研究会を中心に活動してきた。連携委員会は、連携研究会の事前に行われ、連携研究会の運営内容が協議され、決められている。連携委員会の活動は次の通りである。

- 4月 7日 第1回連携委員会
年間計画提案と今年度の運営・方針
- 4月 20日 第2回連携委員会
今年度の運営・研究体制について
- 5月 6日 第3回連携委員会
各チームの研究内容について
一次案内の検討
- 6月 1日 第4回連携委員会
幼小中連携授業研について
- 7月 8日 第5回連携委員会
公開研究会の内容の検討
- 8月 26日 第6回連携委員会
公開研究会の内容と実施形態の検討

- 9月 21日 第7回連携委員会
公開研究会の内容及び
各チームの発表内容の検討
- 10月 14日 第8回連携委員会
事前研究会、公開研究会の内容検討
要項の形式について
- 10月 29日 第9回連携委員会
公開研究会の内容検討、
二次案内、要項の確認
- 12月 3日 第10回連携委員会
事前研究会の運営の確認
公開研究会の内容検討、準備確認
- 1月 12日 第11回連携委員会
公開研究会の運営の詳細確認
連携紀要のプロットの検討
- 2月 8日 第12回連携委員会
今年度の研究活動の反省
次年度の研究体制及び連携研究会の
日程について

(2) 連携研究会・連携授業研究会

連携研究会を開催し、連携委員会の提案を全教員で議論し決定していくボトムアップによる運営が竹早地区連携研究の特徴である。

今年度の連携研究会【○】と授業研究会【◎】の内容は次の通りである。

- 4月 26日 第1回連携研究会
組織提案、活動運営・研究の方向性
- 5月 10日 第2回連携研究会
チーム研究活動、一次案内確認
- 6月 18日 第3回連携研究会
拡大チーム研究活動
- 7月 21日 第4回連携研究会
公開研究会の内容、時程の協議
チーム研究活動
- 8月 27日 第5回連携研究会
公開研究会の実施形態の協議
各チーム研究内容の共有
- 9月 30日 第6回連携研究会
チーム研究活動のみ（全体会なし）

- 10月28日 第7回連携研究会
チーム研究活動のみ（全体会なし）
- 11月11日 第8回連携研究会
公開研，要項，二次案内の内容検討
- 12月10日 事前研究会
チーム研究活動のみ（全体会なし）
- 1月17日 第9回連携研究会
公開研運営の詳細確認
連携紀要の形式の検討
- 1月20日 公開研究会前日準備
本部設営，オンラインの動作確認
開会式・チーム概要発表リハーサル
- ◎1月21日 幼小中連携公開研究会：オンライン
- 2月21日 第10回連携研究会
今年度の研究活動・公開研の反省
次年度の方向性，紀要原稿の検討

以上のように，1年を通して充実した活動を行うことができた。

3 授業研究会

（1）校内研究会

今年度は，コロナウィルス感染拡大防止の観点から，昨年度に引き続き，例年の授業研究会の形ではなく，研究協議の形で行った。協議内容は，中学校独自で行っている「多様性の教育」の研究の次年度の内容であり，研究部の提案をもとに，研究部以外の教員から意見をもらう場となった。

（2）連携授業研究会

今年度は，予定されていた6月19日の幼小中連携授業研究会，12月11日の事前研究会を，コロナウィルス感染拡大防止の観点及び研究内容の観点から，授業研究会ではなく，研究活動に集中的に取り組む場にした。これは，通常連携研究会の短時間では，大学や企業，教育委員会としてじっくり打ち合わせる時間をとることが難しく，研究が思うように進まなかったからである。従って，例年の授業研究会ならば中一中連携の一環として文京区内の中学校の先生方に公開しているところだが，コロナ禍の状況も踏まえ，非公開にした。なお，昨年度から二年続けて，授

業研究会ができない状況が続いているため，授業力の低下も懸念されている。そこで，今年度は，希望があれば，幼小中の教科単位で独自に授業研究会を行うことを推奨し，大学の先生から指導助言を受けられる体制をつくった。実際，算数数学科は，その制度を利用し，2回の授業研究会を実施している。

Ⅲ 研究の成果と課題

1 研究部の活動から

CCSS研究の成果は2つある。1つは，本制度で入学した生徒が今年度も卒業を迎えたことができたことである。4人の卒業生はみな第一志望校への進路を拓くことができ，プロジェクトの目的の一つである「主体的な進路選択」を実現することができた。2つ目は，SSWを含めた校内支援体制について，個別の支援を実践しながら，みえてきた課題の共有とその対策の検討を繰り返すことを通して深めることができた。

「多様性の教育」の研究は，これまでの研究をまとめ，書籍を刊行できたことが成果である。本書を広く発信するとともに，本書を基盤にさらに研究を発展させていくことが課題である。

2 連携研究の活動から

第8期研究「未来の学校をみんなで創ろう」について，研究体制を整え，各チームの研究が軌道にのったことが，今年度の成果である。「未来の学校モデルを創る」という，これまでの教科の実践を深める研究とは大きく異なる研究であることに加え，産官学連携で運営するというこれまでに経験がない新しい取り組みでありながらも，連携委員を中心とした竹早地区の教員の努力もあり，10のチーム全てが研究の基礎を固めつつある段階まで研究を進めることができた。先が見えない中でのスタートだったが，着実に研究の歩みを進められたことは成果である。

次年度は，今年度の成果をもとにした実践を，多くのチームが計画している。各チームが実践を進め，その成果をもとに「未来の学校モデル」

をつくっていくことが次年度の課題である。

報告してきたように、「多様性の教育」の研究はまとめを迎え、CCSSも今年度で終わる。このように、取り組んできたいくつかの研究、プロジェクトが区切りを迎えるが、附属学校の置かれている状況や使命を考えると、今後も新たな研究を立ち上げ、その成果を発信し続けることが必要になる。この意味で、次年度は本校の研究の

過渡期ともいえる。

本校の現状、これからの社会状況を踏まえ、本校の教育、さらには日本の教育の在り方を研究部中心に検討し、それを実現させるような実践研究を行っていく決意である。そして、研究成果を広く全国に発信し、日本の教育研究の中核として役割を果たしていく所存である。

(文責 小岩 大)

【参考資料】

注) 2021年度の幼小中連携研究組織図を示す。

